眼

「あ！あ！その話でその夢で手稿柄たのもとー
ちぎれる程に ふった後！「鏡に祈る」。音楽会で
の姉のひいたピアノの男だ その頃姉五歳
三歳の二と年齢だなと思っていた
お茶お花以外にお習字ピアノをやっていたの
だ 細身で色白のきれいおじょうさんだった
なんなって二十三年になる 月日はほとんど
くすぎる 最近お墓へ行ってない お墓へ行
ってもあえるのは今でない 死にたい 絶りだ

死は迫どう生きたかがたのだ
生人にきかれるとわかうなりが あまり思われ
ていない一生だと思う。
フラフラを張って繁創たらしいことをして
いたし出版関係、広告代理業と紙事をしてい
た いろんな男たちにもてていた時だ
ではの敬愛されていないと思うのかわかる
りがろう思ってしまう つまって行くと
不明 わからないが言う 嘘にそう思って
しまうのは私だけではない 妹も姉のことを

子答相談したと言う

婦の告別式の日　日強元気時代の人達が
二百名ぐらい来てくれた　お通夜の席で
参事部下をひきつれてのそのあるいは
ういた

お通夜をすませた
姉妹でいつもわかる事、ことがたくさんある
外から見た姉ともう一つの部分は知らない
簡単にめぐまれないなんて言えない
外から見えることがいうことか

私は人にどう思われようとかまわない　私
は私と思っている　私は人にやさしいつもり
でいる　しかしかがみをみるときびしい目を
している　その服を見た人はやさしいとは思
わないであろう。　外から見るとい部分だけその
服を見ていると思う。

服はその人の人生を表わしていつの和
もしれない